

令和7年12月

甲南高等学校・甲南高等養護学校 リレーメッセージ

甲南高等学校 教頭

12月に咲く花もありますが、やはり他の季節に比べると、外で花に出会う機会は少ないですね。突然ですが、皆さんは「花」という言葉の由来を知っていますか。

いくつかの説がありますが、その中に、もともと 端っこの「端」を意味していたという興味深い説があります。「出端をくじく」という言い方で、「端」と読む例もありますね。文字通り、枝の先端に咲くことから「花」と呼ばれるようになった、というのです。

そう考えると、私たちが目にしている花は、たまたま 端っこに現れた姿にすぎないのかもしれませんが。花を咲かせるために必要な、根を張ること、養分を蓄えること、寒さに耐えること——そうした営みの多くは、目に見えない「真ん中」で静かに行われています。昔の人はそのことをよく知っていたのではないのでしょうか。

今から700年くらい鎌倉・室町時代の 兼好法師 という人が「徒然草」の中で、次のように言っています。「花は盛りに、月はくまなきをのみ、見るものかは」。現代語に訳すと、「桜の花は満開だけを、月は影のない満月の時だけを、見るものだろうか(そうじゃないですよ)。」という意味です。「何でもわかりやすく目に見えるものだけがいい!」という人がいるけれど、家にいて「今頃どんな月が出ているのかな」と胸をふくらませてみるとか、今にも咲きそうな桜に「どんなふうに咲くのだろう」と想像することのほうが大事なのでは、と兼好法師は言います。

私たちは、ともすれば、つい「目で見えるもの」だけで物事を判断しがちです。しかし、見えないからこそ想像できること、見えないからこそ感じ取れることもあります。それほど花が咲いていない冬だからこそ、色とりどりに咲く春の姿を思い描くことができるように、目に見えない時間が「心」を育ててくれるのかもしれませんが。

目に見える成果がなくても、思うようにいかないことがあっても、それは何も実っていないということではありません。見えないところで力を蓄えている、その時間こそが次へとつながっています。たとえば、皆さんが新しく社会に出ること、次の学年の3年生や2年生になるということは、すでにその前から準備されていると考えてみていいのではないのでしょうか。大人になるということも、すでに日々の生活の真ん中で準備されている。そのように一日一日を大切にしていけたら、と思います。

新しい年のどこかで、皆様にとっての花が咲くことを願っております。よい年をお迎えください。